

平和を守る座標

沖縄市立美東中学校 三年

仲宗根 小華

皆さんは六月二十三日が何の日かご存知ですか。沖縄県は毎年六月二十三日を太平洋戦争における沖縄戦の終結した日として、慰霊の日に制定しています。沖縄戦で亡くなった二十万人以上の犠牲者をはじめ、海外で亡くなった戦没者の冥福と世界の恒久平和を願い、糸満市摩文仁の平和祈念公園では、毎年沖縄全戦没者追悼式が行われます。

沖縄戦における二十万人を越す戦死者のうち、約半数に近い、じつに九万四千人余りの戦死者が兵隊以外の一般住民や子供でした。私は、今でもなぜ沖縄だけが地上戦を体験しなければならなかったのか、こんなに多くの死者が出てしまったのか不思議でなりません。そして祖母や戦争体験者の方々の話を聞くだけですごく辛く、胸が痛くなります。

ある日、祖母と今はもう亡くなってしまった祖父がこう言ったのです。

「自分達は、こんな戦争の話をする事で当時の事を思い出してしまうし、戦争の時に亡くなってしまった人の事も思い出して辛くなる時もある。でも、それを自分達が伝えなかったら誰が戦争の事を伝えていくの?。」

と。その時私は決心しました。こうして祖母達が私に教えてくれた事を、私がまた誰かに伝えていくべきだ、そしてこの沖縄戦と同じような悲劇をもう繰り返してはいけないんだということを。そして祖父の話の中で、すごくショックだった事は、同じ日本人なのに沖縄の人は日本兵から手榴弾を手渡され、「アメリカ軍の兵隊に見つかる惨酷な殺し方で八つ裂きにされるからこの手榴弾を使つて自殺しろ。」と脅され、やはり自分では死にきれないので、お父さんやお母さんが我が子を殺す。戦争中はこのような事が普通に起きていたということです。愛する家族、親戚が自分の目の前で誰かに殺され、または自殺する。そうやって島民一人一人が犠牲になっていったのです。

今、戦争のない平和な沖縄で育っている私達には考えられない事です。でも、実際にこんな悲惨な戦争を体験した方が自分のすぐ近くにいる。知らない、聞いたことない、では済まされない事なのです。平和学習や体験者の方々から学んだ事はウチナーンチュとして決して忘れてはならない事だと思いました。

私の祖父母は当時十二歳、十三歳くらいでした。祖母は歩いて山原まで逃げ助かり、祖父は家族とガマの外を歩いている途中アメリカ兵に見つかり、もう無理だと思って白旗をあげたそうです。ところがアメリカ兵は祖父達を殺すのではなく、自分達が持っていた非常用の食料を与えてくれたそうです。そして、現在北中城イオンモール向かいの島袋にできた収容所にたくさん住民が集められました。そこで男の人達は食料調達に行き、女の人達はその食料を元に食事を作り、収容所の人達で分け与えながら自分の部落に帰る日まで暮らしていたそうです。つまり、少なくともアメリカ兵に見つかった住民は命を落とすことはなかったのです。このように日本兵から聞かされていたアメリカ兵の話と実際に収容所で接したアメリカ兵は全く違うということを知りました。アメリカ兵の本当の敵は日本兵であり沖縄の住民ではなかったのです。このようなアメリカ兵の対応を知っていれば失わなくてすむ命がたくさんあったはずです。集団自決で亡くなった人、自分の子供を自らの手で殺めた人、そういう間違った教えがなければ助かった命がたくさんあったということを知り、とても悲しくなりました。

人間を人間として扱わず人の命を簡単に奪っていく戦争は一体何を残したのでしょうか。どんなに考えても私にはその答えを導き出す事はできません。ただ、はつきりしている事は戦争から何一つ生まれないということです。

生き残った祖父母がいたから今の私がいて悲惨な戦争を体験した人達の思いが今の平和につながっていると思います。

戦争を知らない私達の世代が語り継いでいかなければならないことは、戦争を起こさず平和を守り、沖縄戦で生き残った方達の命を次の世代へ繋げること、語られてきた沖縄戦の実態を伝えていくこと、命のリレーこそ私達に果せられた最大の責任だと思います。

戦争体験者が次々に高齢化し、真実を聞く機会がどんどん減少していくなかで、祖父母から聞いた体験談は私がこれから生きていくなかで平和を守っていく一つの座標となるでしょう。

たくさん犠牲の上に私達の平和が成り立っているということを決して忘れてはいけないと思います。そしてこの平和をいつまでも守っていくことが、祖父母から託された願いだということを心に刻み、これからの平和を築いていきたいです。